



仙台から振り返る

「子ども☆ひかりプロジェクト」の10年



子ども☆ひかりプロジェクトからの贈りもの

2016年6月の「ミュージアムキッズ!全国フェア in 仙台」は、仙台卸商センター・サンフェスタで開催されました。様子を会場を訪れた。足を踏み入れた瞬間、その広い会場とそこを埋め尽くすたくさんの人に驚きました。特に、小さな子どもたちの多いことに。歓声を上げながら、絵の具だらけになりながら、トンネルの迷路をくぐりながら、真剣なまなざしで何かを作りながら……。私が所属する仙台市博物館ではあまり見られない光景でした。小さな子どもたちも「ミュージアムと遊びたい」と思っている、そんな声を聞かされたような気がしました。

もう一つ、新鮮だったのは、全国のミュージアムの学芸員をはじめとするスタッフが生き生きと働いていることでした。これだけたくさんミュージアム関係者が集まるのは、普通は学会や会議がほとんどで、それは互いを向いたいわ内向き集まりです。ところが、ここではみんなが一つの方向、言うまで

もなく子どもたちの方を見て活動していました。しかも分野は違うし、表現方法も様々なままです。そのためか、子どもたちは身体の様々なセンサーを呼び起こされていたようです。スタッフも身体的に反応します。この呼応関係から生まれる熱気と笑いが会場全体に満ち満ちていました。

ミュージアムのスタッフが、施設を飛び出して子どもたちのもとに駆け付け、ミュージアムならではの道具と知恵を使って一緒に遊ぶ面白さ。それは子どもたちにとっても、またミュージアムにとっても、元気が出る「栄養たっぷりのおいしいごちそう」かもしれません。

SMMAも様々な分野のミュージアムが連携して、「おいしいごちそう」を子どもたちや市民と一緒に食べるべく頑張ってきました。その意味でも、この10年間で、子ども☆ひかりプロジェクトの活動には、刺激を受け、考えさせられ、時にその熱量に圧倒されてきました。プロジェクトの活動は、東北の子どもたちだけでなく、私たちに大きな贈りものとなったのです。

樋口智之(仙台市博物館/SMMA幹事会長)



SMMAとは
知的情報資源である仙台・宮城地域のさまざまな博物館が協働することで、地域にとってより有益な機能を獲得していくための共同事業体です。各館の学芸員や専門職員が持つ知識やノウハウを累積し、分野を横断した連携イベント、学校教育への協力や地域で活動する人材の育成支援、観光資源の開発など、単館では実現困難な新たな価値の創出を行い、地域のニーズに合った新時代のミュージアムとなることを目指します。

公式サイト www.smma.jp

SMMA参加館の学芸員をはじめ現場スタッフによるおきの情報や、地域のミュージアムならではの情報をお伝えします。地元のみならず、旅行で訪れた方々にもおおいに役立ち、楽しみながら発見や体験をしていただけるウェブサイトです。



発行・問い合わせ先: 仙台・宮城ミュージアムアライアンス (SMMA) 事務局 仙台市青葉区春日町2-1(せんだいメディアテーク内)
tel: 022-713-4483 fax: 022-713-4482 email: office@smt.city.sendai.jp website: https://www.smma.jp
編集/SMMA事務局 デザイン/ANTWORKS 発行日/2022年1月7日 掲載した記事・情報は発行日の段階のもので、この紙はリサイクルできます



子ども☆ひかりプロジェクトにおいて、
学生たち「ユース・スタッフ」の存在は大きなものでした。
ここでは、学生生活をユースとして過ごした
3人に話をうかがいます。

——子ども☆ひかりの活動に関わるようになったきっかけは?

小沼 2013年に仙台市農業園芸センター(現せんだい農業園芸センター)で開かれた「子ども☆ひかりフェスティバルinせんだい2013」のボランティア募集があって、おもしろそうだなと。

服部 僕もそれです。大学に入ったときにボランティアをやったほうが良いと言われたのもあって、これならできそうだなと。それに、説明会で清水文美さん(子ども☆ひかりプロジェクト代表)の関西弁バリバリのトークに引きこまれました。

佐藤 私は宮城出身で、中学3年生のときに東日本大震災があり、大学生になったら震災復興関係のボランティアをしてみたいと思っていたんです。

——活動のなかで思い出に残っていることは?

服部 たくさんあって選ぶのが大変なくらいです。いま私は児童館の仕事に携わっているということもあり、いわて子どもの森(岩手県立児童館)に行かせてもらったことはよく思い出します。

小沼 地下鉄東西線が開通するとき、それをPRするイベントに助成金が出るというので「企画書を出してごらんよ」と言われて、いろいろ考えたり書いたりしたことが思い出深いです。助成金をとるなんてはじめてでしたし。ちなみに、そのときの企画は、八木山動物公園の象のフンを活用して荒井の畑で南瓜を作っているというので、

八木山と荒井のあいだの大町で子どもたちがクリスマス用のお菓子をつくって、それを八木山動物園に持って行くという企画でした。



地下鉄東西線のPR企画にて

佐藤 私は、子どもたちの価値観が変わったんだと感じる瞬間に立ち会えたことです。たとえば、八木さん(兵庫県立人と自然の博物館)がやっていた、テントのなかに虫を放して、子どもたちが触るイベントでは、最初子どもたちは怖くて触れないのだけど、だんだん興味をわいて触れるようになるんです。それと、フリーペーパー「ミュージアムキッズ」の編集も楽しかったです。ちょうど研究室に配属されたころだったので、研究の息抜きというか、普段とは違う、子どもにも分かりやすい文章を書く機会になりました。



テントのなかに虫を放す

小沼佳菜実(おぬま・かなみ)
宮城教育大学教職大学院卒。大学1年から大学院2年までの6年間ユース・スタッフとして活動。現在、富谷市の小学校で教員として勤務。日々、子どもたちが関わり、学び合う授業の実践に取り組んでいる。

服部修弥(はっとり・しゅうや)
宮城教育大学教職大学院卒。大学1年から大学院2年までの6年間ユース・スタッフとして活動。現在は(公財)仙台ひとまち交流財団勤務し、仙台市内にある80館の児童館の運営管理に関する業務を担当している。

佐藤萌(さとう・もえ)
東北大学大学院卒。大学1年から大学院2年までの6年間ユース・スタッフとして活動。現在、(株)ADEKA勤務。研究職として、治療に用いるための動物由来の生体材料を開発する業務を担当している。

服部 ただ手伝っているのではなく、積極的に関わっていけるところが私たちも楽しかったし、力になった。

——6年間で気がついたこと、役立ったことは?

佐藤 関わってくださった学芸員さんなど大人の人たちが一生懸命で、終わったあとすごく満足した顔をなさっているのですよね。与えられた仕事だけではなく、自分なりに考えて取り組む姿勢が勉強になりました。また、いまは直接子どもと関わる仕事ではないけれど、さまざまな価値観の方と物事を進めていく経験は役に立っています。

小沼 私は小学校の教員で、今も子どもと関わっているんですが、学校は常にねらいが明確でも、ミュージアムはもっと幅広い自由なところですよ。そのなかで子どもが自由に動いていて、学校現場との違いを実感しています。

服部 私はミュージアムのスタッフのみさんから学ぶところが多かったです。子ども☆ひかりを通じた出会いは大きかったし、今もやりとりがある方もいます。

——これからのミュージアムにはどんなことを期待する?

服部 子ども☆ひかりを経験し、いま児童館の仕事をしていて思うのですが、ミュージアムは子どもたちが気軽に足を運び、遊びや体験のなかから自由に何かを感じ取ってくれる場所であってほしいと思います。

小沼 いま服部さんの言ったことと近くて、気軽に行ける場所であると良いなあと。子どもたちにとっては、ミュージアムは少し敷居が高いんです。静かにしないとイケないとか、走っちゃいけないとか。子ども☆ひかりでやってきたように、思いっきりミュージアムを楽しめるようなしなかがあるといい。

佐藤 子どもにとって、学校と家庭に次ぐ、第三の場所になると良いと思います。居場所になったり、話せる大人がいる場所。それも専門家がいるということがポイントだと思います。興味を持ったことに答えてくれる大人がいる場所です。

(2021年11月6日) せんだいメディアテーク+オンラインにて 聞き手:白川由利枝/構成: SMMA事務局)



ユース主体のミュージアムストリート

